

明治百四十五年之

遠野物語

不思議兔企画

明治百四十五年一月

兔

ほんしょ こくりつこつがいとしょかんきんだい
本書は国立国会図書館近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/>
で公開されている柳田國男氏の明治四十三年六月十七日版の『還野物語』
初版350部の第52号(を原書とし、概ね本文の忠実な再現を試みつゝ、
かんじ げんだい めずら ひまうげんどう かな ふ
漢字や現代では珍しくなった表現等には仮名を振り、またところどころに側注
も加筆し、恐らく読むだけならばさほど辞書など引かずとも済む様、それでいて
かひつ おそ よ じしよ ひ す よう
原書の雰囲気も忠実に再現する事を試みました。日本の原風景を伝える良書に
ふんいき にほん げんふうけい つた りようしよ
ひやくねんのち どのしや せんりつ いたた やわ
百年後の現代の読者もまた戦慄して頂ければ幸いです。

なお、なるべく原書の用いる漢字や日本語の表現を忠実に再現したつもりでは
ありますが、文字コードやフォントの都合、字体の異なる場合や、現代日本語の
じようじつ おお ぶぶん
常用漢字で置き代えた部分もあります。もし、加筆された現代仮名の振りや側
注に誤り、改善案などお気づきの点があれば改訂を検討致しますので本書作者
までご連絡下さい。 fohonomonogatari@wonderabbitproject.net

側注は上部が原書から、下部は本書著者による加筆です。気が向いたりど
うぞ。また、片仮名の振り仮名は原書そのまま、平仮名の振り仮名は本書著者に
かたかな ふ がな ひらがな
よる加筆です。

本書のライセンスはクリエイティブ・コモンズのCC-BY-NC-SAライセンス
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/ にて公開しま
す。配布元、著作権者は不思議兎企画 <http://wonderabbitproject.net/>で
す。原書部分はパブリックドメインであり、本書としての著作権の主張は付随す
る仮名や追加の側注に限ります。
ねん もつ たて ききいくさつ ひえいり しようちてき お
念の為に申しますと、例えば教育用はじめ非営利の使用目的に於いて本書を
読書の材料或いは配布資料とするなどに於いて一向に無許諾で構いません。
どくしょ ぶたう しろざつ お じうじつ むきょたく かま

柳田國男氏、佐々木鏡石氏、また今なお伝統を遺す遠野郷の方々に感謝致し
ます。

このしよ がいこく あ ひとびと てい
此書を外國に在る人々に呈す

日本人ではない外國人に向けてという意味ではなく、外國に心馳せる明治43年頃の日本人の読者を主としたのかもしれない。この年は日露戦争から5年後、日韓併合もあつた年。当時の日本は大日本帝國の時代であり、日本列島の外にも国土を持つていた。日本人の多くはきつと当時も東京なり横浜なり、西欧の都市部に伝え聞く近代文明的な世界に少なからず心が旅していたのではなからうか。そう考えると、この言葉、現代人もまたここでいう外國に在る人々の様な氣もする。日本の原風景の重み付けを担う伝承の数々に興味を抱き、知り、そして伝える発端となれば幸いである。

このはなし とおのひとささききようせきくん き さくめいじ
此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり昨明治

よんじゅうにねん にながつころ はじ やぶんおりおりたず きた このはなし
四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね來り此話をせられ

ひつき じぶん またいちじいつく かげん かんじたる
しを筆記せしなり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたる

まま かき おもう とおのこう このたぐい なお
まゝを書きたり。思ふに遠野郷には此類の物語猶数百件ある

われわれ おおく きかん せつぼう こくない さんそん
ならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。國內の山村に

とおの さら ものぶか じよ またむすう やまがみやまど でんせつ
して遠野より更に物深き所には又無數の山神山人の傳説ある

ねが これ かなり へいちじん せんりつ このしよ ごと
べし、願わくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。此書の如き

ちんじようつ げん
は陳勝呉廣のみ。

さくねんはちがつ すえじぶん とおのこう あそ はなまき じゅうより
昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十餘里の

ろじよう ちようばさんかしよ そのほか ただあお やま げんや じんえん
路上には町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人煙の

きしよう ほつかいどういしかり へいや はなは あるい しんどう
希少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。或は新道なる

ゆえ みんきよ きた つ ものすく とおの じようか すなわ えんか
が故に民居の來り就ける者少なきか。遠野の城下は則ち煙花

まち うま えきてい しゅじん か ひと こうがい むらむら めぐ
の街なり。馬を驛亭の主人に借りて獨り郊外の村村を巡りたり。

そのうま くら かいそう もつ つく あつばさ かけたり あぶおお ため
其馬は黔き海草を以て作りたる厚總を掛けたり。虻多き爲な

さるが いし けいこく つちこ ひら ろぼう せきとう おおき
り。猿ヶ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多き

こと諸国其比を知らず。高處より展望すれば早稲正に熟し

おくて はなさか みず へいこ お かわ あり いね いろあい しゆるい
晩稲は花盛んにて水は悉く落ちて川に在り。稲の色合は種類

によりて様々なり。三つ四つ五つの田を續けて稲の色と同じき

すなわちいつか ぞく た いわゆるミヤウシヨ おなじ
は則ち一家に属する田にして所謂名處の同じきなるべし。

こあや ちい くいぎ ちめい じめし あち これ し
小字よりさらに小さき區域の地名は地主に非ざれば之を知ら

ず。古き賣買讓興の證文には常に見ゆる所なり附馬牛の谷

こ はやちね やま あわ かす やま かたち すげかさ ごとくまた
へ越ゆれば早地峯の山は淡く霞み山の形は菅笠の如く又

佐々木鏡石氏は遠野出身にして当時新進の小説家。

「來」→「來」

遠野郷は現在の岩手県遠野市とほぼ相違無いが、明治43年当時は多くの町村に分かれた一帯だった。

傳説→伝説

戦慄→戦慄

平地人は一般的な人里に暮らす比較的文化的な生活を送る人々の事。

陳勝呉廣は古代中国秦で起きた農民による伝説的な初めての反乱の事。目論見としては成功した事になっていた。

花巻も現在の岩手県花巻市は。明治43年は稗貫郡花巻町、稗貫郡花巻川口町は明治22年に同時に成立した異なる町であった。

「録」→「来」

町場は宿や輸送の拠点たる場所。

煙花は中国語で花火の事らしいが、ここでは植物の猫柳の事ではなからうか？

「獨り」→「独り」

「黔い」→「黒い」

「爲」→「為」

「厚總」→「厚総」、馬具の組み合わせの事。甲冑古式馬具工房あり

<http://www.yabun-same-1.com/gloss-ay-harness/index.html>を参考に

「高處」→「高所」

「續けて」→「續けて」

「名處」→「名所」。

かたかな　へ　じ　に　このたに　いねじゆく　さらにおそ　がまのめ
片假名のへの字に似たり。此谷は稲熟すること更に遅く蒲目
いつしき　あお　ほそ　でんちゆう　みち　ゆ　な　し　とり　ひな
一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を
つ　よこ　ひな　いろ　くろ　しろ　はね
連れて横ざりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始は小さ
にわとり　おも　みぞ　くさ　かく　みえ　の　やちよう
き雛かと思ひしが、溝の草に隠れて見えざれば乃ち野鳥なる
ことを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊あり。茲にのみは
しれ　てんじん　やま　まつり　ししおどり　ここ
軽く塵たち紅き物聊かひらめきて一村の縁に映じたり。獅子
おどり　いう　しか　まい　しか　つの　つ　めん　かぶ　どうじ　ごろうく
踊と云ふは鹿の舞なり。鹿の角を附けたる面を被り童子五六
にんつるぎ　ぬ　これ　とも　まう　ふえ　ちようしたか　うた　ひく
人剣を抜きて之と共に舞ふなり。笛の調子高く歌は低くして
そば　き　がた　ひ　かたむ　かぜふ　すい　ひとよ　もの
側にあれども聞き難し。日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の
こえ　さび　おんな　わらい　こ　はし　なおりよしゆう　いかん
聲も淋しく女は笑ひ兒は走れども猶旅愁を奈何ともする能
わ　うらぼん　あた　ほとけ　いえ　こうはく　はた　たか　あ
はざりき。孟蘭盆に新しき佛ある家は紅白の旗を高く揚げて
たましい　まね　ふう　とうげ　ばじよう　お　とうざい　してん　このはた
魂を招く風あり。峠の馬上に於いて東西を指點するに此旗
じゆうすうしよ　むらびと　えいじゆう　ち　さ　もの
十數所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに
はいりこみ　たびびと　また　ゆうゆう　れいざん　たそがれ　おもむろ
入り込みたる旅人と又かの悠々たる靈山とを黄昏は徐に
きたり　ほうよう　つく　とおの　はちかしよ　かんのんどう　いちばく
來りて包容し盡したり。遠野郷には八ヶ所の觀音堂あり。一木
もつ　つく　このひほうさい　とおお　おか　うえ　とうか　ふせがね
を以て作りしなり。此日報賽の徒多く岡の上に燈火見え伏鉦
おとき　いんしよう
の音聞こえたり。道ちがへの叢の中には雨風祭の藁人形あ
あたか　ぎようが
り。恰もくたびれたる人の如く仰臥してありたり。以上は自分
が遠野郷にて得たる印象なり。
おも　このたぐい　しよもつ　すくなく　げんだい　りゆうこう　あら　いかん
思ふに此類の書物は少なくとも現代の流行に非ず。如何に
いんさつ　ようい　ほん　しゅほん　じこ　きようあい　しゆみ
印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狹隘なる趣味
を以て他人に強ひんとするは無作法の仕業なりと云う人あら

「區域」↓「区域」

「實買」↓「売買」

「證文」↓「証文」

附馬牛は現在の遠
野市にも行政区画
として残る地名。

「早地峯」は現在一
般には「早池峰」と
記される山。

菅笠は江戸の頃合
いの時代劇で旅人が
道中でよく被ってい
るあの笠。

「尸假名」
↓「尸仮名」

「緑」↓「緑」

「劍」↓「劍」

「聲」↓「声」

「兒」↓「児」。

孟蘭盆は夏の頃合
いに残るいわゆるお
盆の風習、仏教行
事。

新しき佛はその年に
亡くなった家族。

「指點」↓「指點」。
指さし数えたのであ
ろう。

「數」↓「数」

「靈」↓「霊」

黄昏は夕暮れにして
逢魔時、大禍時。

「盡す」↓「尽くす」

報賽は神仏へのお参
りの事。

燈火は松明なり提
灯なり、篝火もあつ
たかもしれない。

雨風祭の藁人形は
現在も風習が残さ
れており容易に見る
事ができる。

狹隘はとても狭いの
意。

あれ ことう かく はなし ききかく ところ みてらい のちこれ ひと
ざれど敢て答ふ。斯る話を聞き斯る處を見て来て後之を人に
かた もの ば
語りたがらざる者果たしてありや。其様な沈黙にして且つ慎
ぶか ひと すくなく じぶん ゆうじん なか こと いわん わ
深き人は少なくとも自分の友人の中にはある事なし。況や我が
きゆうひやくねんまえ せんぱいこんじやくものがたり こと そのとうじ すで いま
九百年前の先輩今昔物語の如きは其當時に在りて既に今は
むかし はなし はん この このもくぜん できごと たといけいけん
昔の話なりしに反し此は是目前の出来事なり。假令敬虔の
い せいじつ たいど おいて いぢむ か しの とく い あた
意と誠實の態度とに於いては敢て彼を凌ぐことを得と言う能
わ ひと みみ へ おおからずひと うち ふで うつけし
はざらんも人の耳を経ること多からず人の口と筆とを情ひた
るはなは わず せん てん おい か たんぱくむじやき だいなごん
ること甚だ僅かなりし點に於ては彼の淡泊無邪氣なる大納言
どのかえつ きた き あたい きんだい おとぎひやくものがたり いんすら いた
殿却つて來り聽くに値せり。近代の御伽百物語の徒に至り
そのこころし すで いやしいか けつ そのかたり もうたん あら
ては其志や既に陋且つ決して其談の妄誕に非ざることを
ちか え ひそか もつてこれ となり ひ はじ しよう この
誓い得ず。窃に以て之と鄰を比するを恥とせり。要するに此
しょ げんぎい じじつ ひとえ これ りっぱ そんぎい
書は現在の事實なり。單に此の目を以てするも立派なる存在
りゆう しん ただきようせきし としわすか にじゅうし ごじぶん これ
理由ありと信ず。唯鏡石子は年僅に二十四五自分も之に
じつげんぢゆうつ いま じぎようおお じだい う もんだい
十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生まれながら問題の
だいしよう わきまえ そのちから もちい しょうとう うしなえ
大小をも辨へず。其力を用ゐる所當を失へりと言う人あら
いかん みようじん みみずく そのみみ とが
ば如何。明神の山の木兎の如くあまりに其耳を尖らしあまり
そのまなこ まる す せ ひと いかん ぜひ
に其眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらば如何。はて是非も
な このせきにん じぶん おわ
無し。此責任のみは自分が負はねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ
わらう
笑ふらんかも

柳田國男

この辺りは遠野物語を柳田國男が書くにあつたつての少しばかり小難しい風の面白可笑しい長い言い訳。笑つて読めればいいと思われる笑

今昔物語は平安時代にまとめられた当時の印度、中国、日本の説話集。今は昔……と千話以上が記されているらしい。一説に宇治大納言源隆国が編纂に關与したとも云われている。

「假令」→「假令」。漢語の読み下しに由来する現代の例え」にまとめられる表現。

「誠實」→「誠実」
「聽」→「聴」

御伽百物語は宝永3年明治43年から遡る事204年前、徳川吉宗がまだ紀州藩主の頃に刊行されたらしい百物語を基にした怪談集。百物語は日本の伝統的な怪談の手法。

「辨」→「弁」
「所當」→「所当」

木兎は鼻の仲間で耳の様な立派な睫毛の様な羽を持つ鳥。

「おきなさび」は「翁寂び」、を「かた」の「は」落ち方の「とすれば前半の解釈は繋がりが、後半を文字通り捉えれば前の言い訳にも合致する。柳田國男が真に謙虚であつたのかもしれないが、全く合致し過ぎて深読みしたくなる。

だいもく

題目

(下の數字は話の番號なり頁數には非ず)

地勢

一、五、六七、一一一

神の始

二、六九、七四

黒の神

九八

カクラサマ

七二、七四

ゴンゲサマ

一一〇

家の神

一六

オクナイサマ

一四、一五、七〇

オシラサマ

六九

ザシキワラシ

一七、一八

山の神

八九、九一、九三、一〇一、一〇七、一〇八

神女

二七、五四

天狗

二九、六二

山男

五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二

山女

三、四、三四、三五、七五

山の靈異

三二、三三、六一、九五

仙人堂

四九

蝦夷の跡

一一二

塚と森と

六六、一一一、一一三、一一四

姥神

六五、七一

タチ あと
館の址

六七、六八、七六

むかし
昔の人

八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

いえ
家のさま

八〇、八三

いえ せいすい
家の盛衰

一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三

まよ いが
マヨヒガ

六三、六四

ぜんちよう
前兆

二〇、五二、七八、九六

たましい ゆくえ
魂の行方

二二、八六、八八、九五、九七、九九、一〇〇

まぼろし

二三、七七、七九、八一、八二

ゆきおんな
雪女

一〇三

かっぱ
河童

五五、五九

さる フツタチ
猿の経立

四五、四六

さる
猿

四七、四八

オイヌ
狼

三六、四二

くま
熊

四三

きつね
狐

六〇、九四、一〇一

いろいろう とり
色々の鳥

五一、五三

はな
花

三三、五〇

こしやうがつ ぎやうじ
小正月の行事

一四、一〇二、一〇五

雨風祭

一〇九

むかしむかし
昔々

一一五、一一八

かよう
歌謡

一一九

遠野物語

「圍」↓「罫」
「稱」↓「称」

一 遠野郷は今の陸中上閉伊郡の西の半分、山々にて取圍トホノゴウ りくちゅうカミヘイ かこ

へいち シンチャウソン ツチフチ ツクモウシ

まれたる平地なり。新町村にては遠野、土淵、附馬牛、松崎、青
笹、上郷、小友、綾織、鱒澤、宮守、達曾部の一町十ヶ村に分つ。

カミゴウ ヲトモ アヤオリ マスザハ ミヤモリ タツソベ いちようじつかそん わか

近代或は西閉伊郡とも稱し。中古には又遠野保とも呼べり。

きんだいあるい にし となえ ちゅうこ トホノホ よ

今日群役所の在る遠野町は即ち一郷の町場にして、南部家

こんにちぐんやくしよ すなわ いちごう まちば ナンブケ

一萬石の城下なり。城を横田城とも云ふ。此地へ行くには花巻

いちまんごく じょうか しろ ヨコタジャウ このち ゆ ハナマキ

の停車場にて氣車を下り、北上川を渡り、其川の支流猿ヶ石川

ていじょう きしや お キタカミガハ わた そのかわ しりゅうサルガイシガハ

の溪を傳ひて、東の方へ入ること十三里。遠野の町に至る。

タニ ツタ ひがし ほう はい じゅうさんり いた

山奥には珍しき繁華の地なり。傳へ言ふ。遠野郷の地大昔はす

やまおく めず はんか つた いう ち おおむかし

べて一固の湖水なりしに。其水猿ヶ石川と爲りて人界に流れ

い ひとかたまり こすい な にんがい なが

出でしより、自然に此の如き邑落をなせしなりと。されば谷川

い しぜん こ ゆうらく たにかわ

のこの猿ヶ石に落合ふもの甚だ多く、俗に七内八崎ありと稱

おちあう はなは おお ぞく ナ、ナイヤサキ シヨウ

す。内は澤又は谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

ない さわ たに おうしゅう ちめい

二 遠野の町は南北の川の落合に在り。以前は七十七里と

なんぼく オチアヒ いぜん シチシチジウリ

て、七つの溪谷各七十里の奥より賣買の貨物を聚め、其市の日

なな けいこくかななじゅうり おく バイバイ かもつ アツ いち

は馬千匹、八千人の賑はしきなりき。四方の山々の中に最も秀

うませんびき はっせんにな ニギわ しほう やまやま もつと ひい

でたるを早地峯と云ふ。北の方附馬牛の奥に在り。東の方には

ハヤチネ ツクモウシ

六角牛山立てり。石神と云ふ山は附馬牛と達曾部との間に在

ロツコウシ イシガミ タツソベ あいだ

りて、その高さ前の二つよりも劣れり。大昔に女神あり、三人

たか まえ おと おおむかし おんなのかみ さんにん

むすめ ともない こうげん きた ライナイ いずごんげん やしろ
の娘を伴ひて此高原に來り、今の來内村の伊豆權現の社あ
る處に宿りし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を與ふべ
しと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より靈華降りて姉の
姫の胸の上に止りしを、末の姫眼覺めて窃に之を取り、我胸
の上に載せたりしかば、終に最も美しき早地峰の山を得、姉た
ちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神 各 三の山に
住し今も之を領したまふ故に、遠野の女どもは其妬を畏れ
て今も此山には遊ばずと云へり。

三 山々の奥には山人住めり、栃内村和野の佐々木喜兵衛
と云ふ人は今も七十餘にて生存せり。此翁若かりし頃獵を
して山奥に入りしに、遙かなる岩の上に美しき女一人ありて、
長き黒髪を梳りて居たり。顔の色極めて白し。不敵の男なれ
ば直に銃を差し向けて打ち放せしに、彈に應じて倒れたり。

其處に駆け付けて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪
は又そのたけよりも長かりき。後の驗にせばやと思ひて其髪を
いさゝか切り取り、之を縮ねて懷に入れ、やがて家路に向ひし
に、道の程にて耐へ難く睡眠を催しければ、暫く物陰に立寄
りてまどろみたり。其間夢と現との境のやうなる時に、是も丈
の高き男一人近よりて懷中に手を差し入れ、かの縮ねたる黒
髪を取り返し立去ると見れば忽ち睡は覺めたり。山男なるべ
しと云へり。

四 やまぐちむら きちべえ いういえ しゅじん ネットコダチ
山口村の吉兵衛と云ふ家の主人、根子立と云ふ山に入

り、笹を刈りて束と爲し擔ぎて立上らんとする時、笹原の上を
かぜ ふ わた ふうづ はやし

風の吹き渡るに心付きて見れば、奥の方なる林の中より若き
女チサナゴの穉兒を負ひたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。極

めてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。兒を結い

付けたる紐は藤の蔓にて、これも著たる衣類は世の常の縞物な

れど、裾のあたりはぼろ／＼に破れたるを、色々の木の葉などを

添へて綴りたり。足は地に著くとも覺えず。事も無げに此方に

近より、男のすぐ前を通りて何方へか行き過ぎたり。此人は其

折の怖ろしさより煩ひ始めて、久しく病みてありしが、近き頃

亡せたり。

五 遠野郷より海岸の田ノ濱、吉利吉里などへ越ゆるには、

昔より笛吹峠と云ふ山路あり。山口村より六角牛の方へ入り

路のりも近かりしかと近年此峠を越ゆる者、山中にて必ず

山男山女に出逢ふより。誰も皆怖ろしがりて次第に往來も稀

になりしかば、終に別の道を境木峠と云ふ方に開き、和山を

馬次場として今は此方ばかりを越ゆるやうになれり。二里以上

の迂路なり。

六 遠野郷にては豪農のことを今でも長者と云ふ。青笹村

大字糠前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、

同じ村の何某と云ふ獵師、或日山に入りて一人の女に遭ふ。怖

ろしくなりて之を撃たんとせしに、何をぢでは無いか。ぶつなど
云ふ。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。何故にこんな
處には居るぞと問へば、或物に取られて今は其妻となれり。子
もあまた生みたれど、すべて夫が食ひ盡して一人此の如く在
り。おのれは此地に一生涯を送ることなるべし人にも言ふな。
御身も危ふければ疾く歸れと云ふまゝに、其在所をも問ひ明ら
めずして遁げ還れりと云ふ。

七 上郷村の民家の娘、栗を拾ひに山に入りたるまゝ歸り來
らず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕を形代と
して葬式を執行ひ、さて二三年を過ぎたり。然るに其村の者獵
をして五葉山の腰のあたりに入りしに、大なる岩の藪ひかゝり
て岩窟のやうになれる所にて、圖らず此女に逢いたり。互に打
驚き、如何にしてかゝる山には居るかと問へば、女の曰く、山に
入りて恐ろしき人にさらはれ、こんな所に來たるなり。遁げて
歸らんと思へど些かの隙も無しとのことなり。其人は如何なる
人かと問ふに、自分には竝の人間と見ゆれど、たゞ丈極めて高
く眼の色少し凄しと思はる。子共も幾人か生みたれど、我に似
ざれば我子には非ずと云ひて食ふにや殺すにや、皆何れへか
持去りてしまふ也と云ふ。まことに我々と同じ人間かと押し返
して問へば、衣類なども世の常なれど、たゞ眼の色少しちがへり。
一市間に一度か二度、同じやうなる人四五人集り來て、何事か

話を爲し、やがて何方へか出て行くなり。食物など外より持ち

來るを見れば町へも出るることならん。かく言う中にも今にそこへ

かえつ

歸つて來るかも知れずと云ふ故、獵師も恐ろしくなりて歸りた

りと云へり。二十年ばかりも以前のことかと思はる。

タツガレ

かみかく

八 黄昏に女や子共の家の外に出て居る者はよく神隠しに

ヨソ くにへに

サムト

あふことは他の國々と同じ。松崎村の寒戸と云ふ所の民家にて、

なし き

もと

ザウリ

ヌ

お

お

ゆきかた

若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるまゝ行方を知らずな

あるひしんるいちいん

ひとびとそのいえ

り、三十年あまり過ぎたりしに、或日親類知音の人々其家に集

りてありし處へ極めて老いさらばひて其女歸り來れり。如何に

して歸つて來たかと問へば、人々に逢ひたかりし故歸りしなり。

ふたた

あと

とじ

い

う

そのひ

さらば又行かんとて、再び跡を留めず行き失せたり。其日は風

はげ

ふ

の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒が

はげ

ふ

しき日には、けふはサムトの婆が歸つて來さうな日なりと云ふ。

きくちやのすけ

ろうじん

ダチン

なりわい

ふえ

九 菊池彌之助と云ふ老人は若き頃駄賃を業とせり。笛

めいじん

ヨトホ

うま

お

の名人にて、夜通しに馬を追ひて行く時などは、よく笛を吹き

ウスツキヨ

なかも

もの

とも

はま

ながら行きたり。ある薄月夜に、あまたの仲間の者と共に濱へ

こ

越ゆる境木峠を行くとて、又笛を取出して吹きすさみつゝ、大

ヤチ

シラカンバ

谷地と云ふ所の上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺の林

しげく、其下は葦など生じ濕りたる澤なり。此時谷の底より

なにももの

たか

こえ

おもしろ

よ

このときたに

そい

いろ

何者かが高き聲にて面白いでーと呼はる者あり。一同悉く色

うしない

を失ひ走ったりと云へり。

一〇 此男ある奥山に入り、茸を探るとて小屋を掛け宿りてありしに、深夜に遠き處にてきやーと云ふ女の叫聲聞こえ胸を轟かしたることあり。里へ歸りて見れば、其同じ夜、時も同じ刻限に、自分の妹なる女その息子の爲に殺されてありき。

一一 此女と云ふは母一人子一人の家なりしに、嫁と姑との仲悪しくなり、嫁は屢親里へ行きて歸り來ざることあり。其日は嫁は家に在りて打臥して居りしに、晝の頃になり突然と悴の言ふには、ガガはとても生しては置かれぬ、今日はきつと殺すべしとて、大なる草薙鎌を取り出し、ごしぐと磨ぎ始めたり。その有様更に戯言とも見えざれば、母は様々に分けて詫びたれども少しも聽かず。嫁も起出で泣きながら諫めたれど、露従ふ色も無く、やがては母が遁れ出でんとする様子あるを見て、前後の戸口を悉く鎖したり。使用に行きたしと言へば、おのれ自ら外より便器を持ち來りて此へせよと云ふ。夕方にもなりしかば母も終にあきらめて、大なる圍爐裡の側にうづくまり只泣きて居たり。悴はよく／＼磨ぎたる大鎌を手にして

近より來り、先づ左の肩口を目掛けて薙ぐやうにすれば、鎌の刃先爐の上の火棚に引掛かりてよく斬れず。其時に母は深山の奥にて彌之助が聞き付けしやうなる叫聲を立てたり。二度目

には右の肩より切り下げたるが、此にても猶死絶えずしてある所へ、里人等驚きて馳付け悴を取抑へ直に警察官を呼び渡

したり。警官がまだ棒を持ちてある時代のことなり。母親は男
が捕へられ引き立てられて行くを見て、瀧のやうに血の流るゝ
中より、おのれは恨も抱かずに死ぬるなれば、孫四朗は宥した
まはれと言ふ。之を聞きて心を動かさぬ者は無かりき。孫四朗
は途中にても其鎌を振上げて巡査を追ひ廻しなどせしが、
狂人なりとて放免せられて家に歸り、今も生きて里に在り。

一二 土淵村山口に新田乙藏と云ふ老人あり。村の人は乙爺
といふ。今は九十に近く病みて將に死んとす。年頃遠野郷の
昔の話をよく知りて、誰かに話して聞かせ置きたしと口癖のや
うに言へど、あまり臭ければ立ち寄りて聞かんとする人なし。
處々の館の主の傳記、家々の盛衰、昔より此郷に行はれし歌
の數々を始めとして、深山の傳説又は其奥に住める人々の
物語など、此老人最もよく知れり。

一三 此老人は數十年の間山の中に獨にて住みし人なり。
よき家柄なれど、若き頃財産を傾けて失ひてより、世の中に
思を絶ち、峠の上に小屋を掛け、甘酒を往來の人に賣りて
活計とす。駄賃の徒は此翁を父親のやうに思ひて親しみたり。
少しく収入の餘あれば、町に下り來て酒を飲む。赤毛布にて作
りたる半纏を着て、赤き頭巾を被り酔へは町の中を踊りて歸る
に巡査もとがめず。愈老衰して後、舊里に歸りあはれなる暮
しを爲せり。子供はすべて北海道へ行き、翁唯一人也。

一四 ブラク 部落には必ず一戸の舊家ありて、オクナイサマと云ふ神

マツ を祀る。其家をば大同と云ふ。此神の像は桑の木を削りて顔を
エガ 描き、四角なる布の眞中に穴を明け、之を上より
ヌノ マンナカ ア ウヘ

トホ 通して衣裳とす。正月の十五日には小字中の人々この家に集り
コアザチウ

來りて之を祭る。又オシラサマと云ふ神あり。此神の像も亦同
マウ

じやうにして造り設け、これも正月の十五日に里人集まりて之
サトビト を祭る。其式には白粉を神像の顔に塗ることあり。大同の家に
オシロイ

は必ず畳一帖の室ある。此部屋にて夜寝る者はいつも不思議
タニミ シツ ヘヤ ヨルネ

に遭ふ。枕を返すなどは常のことなり。或は誰かに抱起され、又
ア マクラ カヘ

は室より突き出さるゝこともあり。凡そ静かに眠ることを許さ
ツ イダ ぬなり。

一五 サイハヒ オクナイサマを祭れば 幸多し。土淵村大字柏崎の長
カシ分キ

者阿部氏、村にては田圃の家と云ふ。此家にて或年田植えの人
タンボ ウチ タウエ ヒト

手足らず、明日は空も恠しきに、僅ばかりの田を植ゑ残すこと
デタ アス ソラ アヤ ワツカ ウエ

かなどつぶやきてありしに、ふと何方よりも無く丈低き小僧
イツチ コソウ

一人來りて、おのれも手傳ひ申さんと言ふに任せて働かせて置
ハダラ

きしに、午飯時に飯を食はせんとて尋ねたれど見えず。やがて
ヒルメシドキ メシ

再び歸り來て終日、代を掻きよく働きて呉れしかば、其日に植
シロ カ ク

ゑはてたり。どこの人かは知らぬが、晩には來て物を食ひたまへ
サソ

と誘ひしが、日暮れて又其影見えず。家に坐敷に入り、オクナイ
カゲ

サマの神棚カミダナの所に止りてありしかば、さてはと思ひて其扉トビラを開き見れば、神像の腰より下は田の泥ドロにまみれていませし由。

一六 コンセサマを祭れる家も少なからず。此神の神體はオコマサマとよく似たり。オコマサマの社は里に多くあり。石又は木にて男の物を作りて捧ぐる也。今は追々とその事少なくなれり。

一七 舊家キウカにはザシキワラシと云ふ神の住みたまふ家少なからず。此神は多くは十二三ばかりの童兒なり。折々人に姿を見することあり。土淵村大字飯豊イヒラ イマフチの今淵勘十郎と云ふ人の家にては、近き頃高等女學校に居る娘の休暇にて歸りてありしが、或日廊下ロウカにてはたとザシキワラシに行き逢ひ大に驚きしことあり。

これは正しく男の兒なりき。同じ村山口なる佐々木氏にては、母人ひとり縫物して居りしに、次の間にて紙のがさくヘヤと云ふ音あり。此室は家の主人の部屋ヘヤにて、其時は東京に行き不在の折なれば、恠しと思ひて坂戸を開き見るに何の影も無し。暫時シバラクワラシなりけりと思へり。此家にも坐敷ワラシ住めりと云ふこと、久しき以前よりの沙汰なりき。此神の宿りたまふ家は富貴自在なりと云ふことなり。

一八 ザシキワラシ又女の兒なることあり。同じ山口なる舊家にて山口孫左衛門と云ふ家には、童女の神二人いませりと云ふことを久しく言傳へたりしが、或年同じ村の何某と云ふ男町よ

り歸るとて留場の橋のほとりにて見慣れざる二人のよき娘に逢
へり。物思はしき様子にて此方へ來る。お前たちはどこから來た
と問へば、おら山口の孫左衛門が處から來たと答ふ。此から何
處へ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答ふ。その何某
は稍離れたる村にて今も立派に暮せる豪農なり。さては孫左衛
門が世も末だなど思ひしが、それより久しからずして、此家の
主從二十幾人、茸の毒に中りて一日のうちに死に絶え、七歳の
女の子一人を残せしが、其女も亦年老いて子無く、近き頃病み
て失せたり。

一九 孫左衛門が家にては、或日梨の木めぐりに見慣れぬ
茸のあまた生えたるを、食はんか食ふまじきかと男共の評議し
てあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食はぬがよしと制した
れども、下男の一人在云ふには、如何なる茸にしても水桶の中
に入れて苧殻を以てよくかき廻して後食へば決して中ることな
しとて、一同此言に従ひ家内悉く之を食ひたり。七歳の兒は其
日外に出で、遊びに氣を取られ、茸飯を食ひに歸ることを忘れ
し爲に助かりたり。不意の主人の死去にて人々の動轉してある
間に、遠き近き親類の人々、或は生前に貸ありと云ひ、或は約
束ありと稱して、家の貸財は味噌の類までも取去りしかば、此
村草分の長者なりしかども、一朝にして跡方も無くなりたり。

二〇 きようへん 此凶變の前には色々の前兆ありき。男ども茹置きたる

ヌサ 秣を出すとして三ッ齒の鋤にて搔きまはせしに、大なる蛇を見

出したり。これも殺すなど主人が制せしをも聽かずして打殺したりしに、其跡より秣の下にいくらとも無き蛇ありて、うごめき

出でたるを、男ども面白半分に悉く之を殺したり。さて取捨つ

べき所も無ければ、屋敷の外に穴ソトを掘りて之を埋め蛇塚を作る。

その蛇は簀アジカに何荷とも無くありたりといへり。

二一 右の孫左衛門は村には珍しき學者にて、常に京都より和漢の書を取寄せて讀み耽りたり。少し變人と云ふ方なりき。

狐と親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、先ず庭の中

に稻荷イナリの祠ホコラを建て、自身京に上りて正一位の神階ノボを請けて歸

り、それよりは日々一枚の油揚げアブラゲを缺かかすことなく、手づから社

頭ソナに供へて拜はいを爲せしに、後には狐馴れて近づけども遁ニげず。

延して其首を抑へなどしたりと云ふ。村に在りし薬師やくしの堂守どうもりは、

我が佛様は何物をも供へざれども、孫左衛門の神様よりは御利益ありと、度々笑ひごとにしたりと也。

二二 佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に納め親族

の者集り來て其夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘らんしんにて亂心の

爲離縁りえんせられたる婦人も亦其中に在りき。喪の間は火の氣けを

絶イやすことを忌むが所の風なれば、祖母と母との二人のみは、

大なる圍爐裡中の両側に座り、母人は旁リヤウガハに炭籠スハを置き折々炭

を繼つぎてありしに、ふと裏口の方より足音して來る者あるを見れば、亡ナくなりし老女なり。平生腰かゞみて衣物の裾の引ずるを三角に取上げて前に縫付けてありしが、まぎミぐオボとその通りにて、縞目にも見覚えあり。あなやと思ふ間も無く、二人の女の座れる爐の脇を通り行くとて、裾にて炭取にさはりしに、丸き炭取なればくるくるとまはりたり。母人は氣丈キジャウの人なれば振り返りあと見送りたいれば、親類の人々の打臥したる座敷の方へ近より行くと思ふ程に、かの狂女のけたましき聲にて、おばあさんが來たと叫びたり。其餘そのよの人々は此聲に睡を覺し只打驚くばかりなりしと云へり。

二三 同じ人の二七日の對夜に、知音ふたなか タイヤ ちいんの者集りて、夜更くるまで念佛を唱へ立歸らんとする時、門口カドグチの石に腰掛けてあちらを向ける老女あり。其うしろ付正しく亡くなりし人の通りなりき。

此は數多の人見たる故に誰も疑はず。如何なる執著シウヂヤクのありしにや、終に知る人はなかりし也。

二四 村々の舊家を大同と云ふは、大同元年に甲斐國より移り來たる家なればかく云ふとのことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本國なり。二つの傳説を混じたるには非ざるか。

二五 大同の祖先たちが始めて此地方に到著せしは、恰あたも歳の暮にて、春のいそぎの門松を、まだ片方はえ立てぬうちに早元

日になりたればとて、今も此家々にては吉例として門松の片方を地に伏せたるまゝにて、標縄シメナハを引き渡すとのことなり。

二六 柏崎の田圃のうちと稱する阿部氏は殊に聞こえたる舊家なり。此家の先代に彫刻に巧なる人ありて、遠野一郷の神佛の像には此人の作りたる者多し。

二七 早地峯ハヤチネより出で、東方の方宮古ミヤコの海に流れ入る川を閉伊川イと云ふ。其流域は即ち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて

今は池の端と云ふ家の先代の主人、宮古へ行きての歸るき、此川ハラダイの原臺の淵と云ふあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙を託す。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、

手を叩けば宛名の人出で来るべしとなり。此人請け合ひはしたれども路々心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部に行き逢へり。此手紙を開きよみて曰く、此を持ち行かば汝の身に大なる災あるべし。書き換へて取らすべしとて更に別の手紙を興へたり。

これを持ちて沼に行き教の如く手を叩きしに、果して若き女出で、手紙を受け取り、其禮れいなりとて極めて小さき石臼いしうすを呉くれたり。

米を一粒入れて回せば下より黄金出づ。此寶物タカラモノの力にてその家稍富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度に澤山たくさんの米を

つかみ入れしかば、石臼は頻しきじに自ら回りて、終には朝毎に主人が此石臼に供へたりし水の、小さき窪みの中に溜りてありし中へ滑り入りて見えなくなりたり。その水溜りは後に小さき池にな

カタハラ
りて、今も家の旁に在り。家の名を池の端と云ふも其爲なり
と云ふ。

二八 始めて早地峯に山路をつけたるは、附馬牛村の何某と云
ふ獵師にて、時は遠野の南部家入部の後のことなり。其頃まで
ニフフ
は土地の者一人として此山には入りたる者無かりし也。この獵
師半分ばかり道を開きて、山の半腹に假小屋を作りて居りし
頃、或日爐の上に餅を並べ焼きながら食ひ居りしに、小屋の外
を通る者ありて頻に中を窺ふさまなり。よく見れば大なる坊
しきり
主也。やがて小屋の中に入り來り、さも珍しげに餅の焼くるを
見てありしが、終にこゝらへ兼ねて手をさし延べて取りて食ふ。獵
師も恐ろしければ自らも亦取りて與へしに、嬉しげになほ食ひ
あた
たり。餅皆になりたれば歸りぬ。次の日も又來るならんと思ひ、
餅によく似たる白き石を二二三つ、餅にまじへて爐の上に載せ
置きしに、焼けて火のやうになれり。案の如くその坊主けふも
來て、餅を取りて食ふこと昨日の如し。餅盡きて後其白石をも
同じやうに口に入れたりしが、大に驚きて小屋を飛び出し姿見
えずなれり。後に谷底にて此坊主の死してあるを見たりと云へ
り。

二九 ゲイトウザン 雞頭山は早地峯の前面に立てる峻峯なり。しゅんぽう 麓の里にて
マヘヤクシ
は又前藥師とも云ふ。天狗住めりとして、早地峯に登る者も決して此山は掛けず。山口のハチトと云ふ家の主人、佐々木氏の祖

父と竹馬ちくまの友なり。極めて無作法にて、鉞マサカリにて草を蒔り鎌に

て土を掘るなど、若き時は亂暴の振舞のみ多かりし人なり。或

時人と賭カケをして一人にて前藥師に登りたり。歸りての物語に曰

く、頂上に大なる岩あり、其岩の上に大男三人居たり。前にあ

またの金銀をひろげたり。此男の近よるを見て氣色ケシキばみて振り

返る、その眼の光極めて恐ろし。早地峯に登りたるが途みちに迷ひ

て來たるなりと言へば、然らば送りて遣るべしとて先に立ち、麓

近き處まで來り、眼を塞フサげと言ふまゝに、暫時そこに立ちて居

る間に忽ち異人は見えなくなりたりと云ふ。

三〇 小國村の何某と云ふ男、或日早地峯に竹を伐キりに行き

しに、地竹の夥チダケしく茂りたる中に、大なる男一人寢て居たる

を見たり。地竹にて編みたる三尺ばかりの草履オビタマを脱脱ぎてあり。

仰アホに臥して大なる躰イビキをかきてありき。

三一 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらはれて行く者

年々多くあり。殊に女に多しとなり。

三二 千晩ヶ嶽センバンガダケは山中に沼あり。此谷は物すごく腥ヌマき臭ナマダサの

する所にて、此山に入り歸りたる者はまことに少し。昔何の隼スクナ

人と云ふ獵師あり。其子孫今もあり。白き鹿を見て之を追ひ此

谷に千晩こもりたれば山の名とす。其白鹿撃たれて遁げ、次の

山まで行きて片肢折れたり。其山を今片羽山と云ふ。さて又前

なる山へ來て終に死にたり。其地を死助シスケと云ふ。

三三 白望シロミの山に行きて泊トマれば、深夜にあたりの薄明ウスアカるくなる

ことあり。秋の頃茸キノコを探りに行き山中に宿する者、よく此事に逢ふ。又谷のあなたにて大木を伐り倒す音、歌の聲など聞ゆる

ことあり。此山の大きさは測ハカるべからず。五月に萱かやを茹ゆりに行く

とき、遠く望めば桐の花の咲き満ちたる山あり。恰も紫の雲のたなびけるが如し。されども終に其あたりに近づくこと能はず。

曾かつて茸を探りに入りし者あり。白望の山奥にて金の樋トイと金の杓しゃくとを見たり。持ち歸らんとするに極めて重く、鎌にて片端を

削り取らんとしたれどそれもかなはず。又來んと思ひて樹の皮を白くし栞シオリとしたりしが、次の日人々と共に行きて之を求め

たれど、終に其木のありかをも見出し得ずしてやみたり。

三四 白望の山續つづきに離森ハナレモリと云ふ所あり。その小字コアザに長者屋

敷と云ふは、全く無人の境なり。茲こゝに行きて炭を焼く者ありき。

或夜その小屋の垂菰タレコモをかくげて、内を覗ウカミふ者を見たり。髪を長

く二つに分けて垂れたる女なり。此あたりにても深夜に女の叫聲を聞くことは珍しからず。

三五 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を探りに行きて宿りし

夜、谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ぎりて、女の走り行くを見たり。中空を走るやうに思はれたり。待てちやアと二聲ばかり呼はりたるを聞けりとぞ。

三六 猿の經立、御犬の經立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近き二ツ石山は岩山なり。ある雨の火、小學校より歸る子ども此山を見るに、處々の岩の上に御犬うづくまりてあり。やがて首を下より押上ぐるやうにしてかはるくホ吠えたり。正面より見れば生れ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さしと云へり。御犬のうなる聲ほど物凄く恐ろしきものは無し。

三七 境木峠と和山峠との間にて、昔は駄賃馬を追ふ者、屢狼に逢ひたりき。馬方等は夜行には大抵十人ばかりも群を爲し、その一人が牽く馬は一端綱とて大抵五六七匹までなれば、常に四五十匹の馬の數なり。ある時二三百ばかりの狼追い來り、其足音山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしきに馬も人も一所に集まりて、其めぐりに火を燒きて之を防ぎたり。されど猶其火を躍り越えて入り來るにより、終には馬の綱を解き之を張り回らせしに、ハ窸などなりと思ひけん、それより後は中に飛び入らず。遠くより取圍みて夜の明るまで吠えてありきとぞ。

三八 小友村の舊家の主人にて今も生存せる某爺と云ふ人町より歸りに頻に御犬の吠ゆるを聞きて、酒に酔ひたればおのれも亦其聲をまねたりしに、狼も吠えながら跡より來るやうなり。恐ろしくなりて急ぎ家に歸り入り、門の戸を堅く鎖して

ウチヒソ
打潜みたれども、夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる聲やまず。夜
ア
明けて見れば、馬屋の土臺の下を掘り穿ちて中に入り、馬の七
トダイ
頭ありしを悉く食ひ殺してゐたり。此家はその頃より産稍傾
い
さんややかたむ
きたりとのことなり。

三九 佐々木君幼き頃、祖父と二人にて山より歸りしに、村に
近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は
マ
破れ、殺されて間も無きにや、そこよりはまだ湯氣立てり。祖父
ユゲ
の曰く、これは狼が食ひたるなり。此皮ほしけれども御犬は必
オイヌ
ずどこか此近所に隠れて見てをるに相違なければ、取ることが
お
出来ぬと云へり。

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すと云へり。草木の色の
サウモク
移り行くにつれて、狼の毛の色も季節ごとに變りて行くものな
かわ
り。

四一 和野の佐々木喜兵衛、或年境木越の大谷地へ狩にゆき
シスケ
たり。死助の方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は
つぎ
散り盡し山もあらは也。向の峯より何百とも知れぬ狼此方へ
ムカフ
群れて走り来るを見て恐ろしさに堪へず、樹の梢に上りてあり
ノボ
しに、其樹の下を夥しき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。
おびただ
その頃より遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二 六角牛山の麓にヲバヤ、板小屋など云ふ所あり。廣き萱
ロツコウシ
山なり。村々より苅りに行く。ある年の秋飯豊村の者ども萱を
イヒデムラ
かや

苟るとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを殺し
一つを持ち歸りしに、その日より狼の飯豊衆の馬を襲ふことや
まず。外の村々の人馬には聊かも害を爲さず。飯豊衆相談して
狼狩を爲す。其中には相撲を取り平生力自慢の者あり。さて
野に出で、見るに、雄の狼は遠くにをりて來らず。雌狼一つ鐵と
云ふ男に飛び掛りたるをワツボ口を脱ぎて腕に巻き、矢庭に其
狼の口の中に突込みしに、狼之を噛む。猶強く突き入れながら
人を喚ぶに、誰も々々怖れて近よらず。其間に鐵の腕は狼の腹
まで入り、狼は苦しまぎれに鐵の腕骨を噛み砕きたり。狼は其
場にて死したれども、鐵も擔がれて歸り程なく死したり。

四三 一 昨年の遠野新聞にも此記事を載せたり。上郷村の熊
と云ふ男、友人と共に雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入り
しに、熊の足跡を見出でたれば、手分して其跡を覓め、自分は
峯の方を行きしに、とある岩の陰より大なる熊此方を見る。矢
頃あまりに近かりしかば、銃をすて、熊に抱へ着き雪の上を轉
びて谷へ下る。連の男之を救はんと思へども力及ばず。やがて谷
川に落入りて、人の熊の下になり水に沈みたりしかば、その隙に
獸の熊を打取りぬ。水にも溺れず、爪の傷は數ヶ所受けたれど
も命に障ることはなかりき。

四四 六角牛の峯續きにて、橋野と云ふ村の上なる山に金坑
あり。この鑛山の爲に炭を焼きて生計とする者、これも笛の上

手にて、ある日晝の間小屋に居り、仰向に寢轉びて笛を吹きて
ありしに、小屋の口なる垂菰をかくぐる者あり。驚きて見れば
猿の經立なり。恐ろしくて起き直りたれば、おもむろに彼方へ
去り行きぬ。

四五 猿の經立はよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み
去ること多し。松脂を毛に塗り砂を其上に附けてをる故、毛皮
は鎧の如く鐵砲の彈も通らず。

四六 栃内村の林崎に住む何某と云ふ男、今は五十に近し。
十年あまり前のことなり。六角牛に鹿を撃ちに行き、オキを吹
きたりしに、猿の經立あり、之を眞の鹿なりと思ひしか、地竹
を手にて分けながら大なる口をあけ嶺の方より下り來れり。膽
潰れて笛を吹止めたなれば、やがて反れて谷の方へ走り行きた
り。

四七 此地方にて子供をおどす語に、六角牛の猿の經立が來
るぞと云ふこと常の事なり。此山には猿多し。緒持の瀧を見に
行けば、崖の樹の梢にあまた居り、人を見れば遁げながら木の
實などを擲ちて行くなり。

四八 仙人峠にもあまた猿をりて行人に戯れ石を打ち付けな
どす。

四九 仙人峠は登り十五里下り十五里あり。其中程に仙人の
像を祀りたる堂あり。此堂の壁には旅人がこの山中にて遭ひた

る不思議の出来事を書き識すこと昔より習なり。例へば、我は
越後の者なるが、何月何日の夜、この山路にて若き女の髪を垂
れたるに逢へり。こちちを見てにこと笑ひたりと云ふ類なり。又
此所にて猿に悪戯をせられたりとか、三人の盗賊に逢へりと云
ふやうなる事を記せり。

五〇 死助の山にカツコ花あり。遠野郷にても珍しと云ふ花な
り。五月閑古鳥の啼く頃、女や子ども之を探りに山へ行く。酢
の中に漬けて置けば紫色になる。酸漿の實のやうに吹きて遊
ぶなり。此花を探ることは若き者の最も大なる遊樂なり。

五一 山には様々の鳥住めど、最も寂しき聲の鳥はオット鳥な
り。夏の夜中に啼く。濱の大槌より駄賃附の者など峠を越え來
れば、遙に谷底にて其聲を聞くと云へり。昔ある長者の娘あり。
又ある長者の男の子と親しみ、山に行きて遊びしに、男見え
なりたり。夕暮になり夜になるまで探しあるきしが、之を見つ
ることを得ずして、終に此鳥になりたりと云ふ。オットーン、オ
ットーンと云ふは夫のことなり。末の方がすれてあはれなる鳴
聲なり。

五二 馬追鳥は時鳥に似て少し大きく、羽の色は赤に茶を帯
び、肩には馬の綱のやうなる縞あり。胸のあたりにクツゴゴのや
うなるかたあり。これも或長者が家の奉公人、山へ馬を放しに
行き、家に歸らんとするに一匹不足せり。夜通し之を求めある

きしが遂に此鳥となる。アーホー、アーホーと啼くは此地方にて野に居る馬を追ふ聲なり。年により馬追鳥里に來て啼くことあるは飢餓の前兆なり。深山には常に住みて啼く聲を聞くなり。

五三 郭公クワツコウと時鳥ホトギスとは昔有りし姉妹なり。郭公は姉なるが

ある時芋イモを掘りて焼き、そのまはりの堅き所を自ら食ひ、中の

軟かなる所を妹に與へたりしを、妹は姉の食ふ分は一層旨ウマかる

べしと想ひて、包丁にて其姉を殺せしに、忽ちに鳥となり、ガン

コ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅い所と云ふ

ことなり。妹さてはよき所をのみおのれに呉れしなりけりと思

ひ、悔恨に堪へず、やがて又これも鳥になりて包丁かけたと啼き

たりと云ふ。遠野にては時鳥のことを包丁かけと呼ぶ。盛岡邊

にては、時鳥はどちらやへ飛んでたと啼くと云ふ。

五四 閉伊川ヘイガハの流には淵多ナガレく恐ろしき傳説少なからず。小國

川との落合に近き所に、川井と云ふ村あり。其村の長者の奉公

人、ある淵の上なる山にて樹を伐るとて、斧を水中に取落した

り。主人の物なれば淵に入りて之を探しに、水の底に入るまゝに

物音聞ゆ。之を求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき

娘機ハタを織りて居たり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありた

り。之を返したまはらんとする時、振り返りたる女の顔を見れ

ば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべ

れば我が此所にあることを人に言ふな。其禮^{れい}としては其方

コフトコロ
シンシヤウヨ

身上良くなり、奉公をせずともすむやうにして遣らんと言ひた

り。その爲なるか否かは知らず、其後胴引など云ふ博奕^{ドウビキ}に不思議

ツマ

カネタマ

チウグラキ

議に勝ち續けて金溜り、程なく奉公をやめ家に引込みて中位

ト

の農民になりたれど、此男は疾くに物忘れして、此娘の言ひし

ホトリ

ス

ことも心付かずしてありしに、或日同じ淵の邊を過ぎて、町へ

トモナ

行くとて、ふと前の事を思ひ出し、伴へる者に以前かゝることあ

りきと語りしかば、やがて其噂は近郷に傳はりぬ。其頃より男

カタム

は家産再び傾き、又昔の主人に奉公して年を経たり。家の主

ナンガ

人は何と思ひしにや、その淵に何荷とも無く熱湯を注ぎ入れな

コウ

どしたりしが、何の效も無かりしとのことなり。

カツバ

五五 川には河童多く住めり。猿ヶ石川殊に多し。松崎村の

カハバタ

ウチ

川端の家にて、二代まで續けて河童の子を孕みたる者あり。生

キ

キサ

イツシヤウダル

ウツ

カタチ

まれし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めたり。其形

しゅうかい

むこ

ニヒハリ

極めて醜恠なるものなりき。女の智の里は新張村の何某と

ヒト

シマウ

て、これも川端の家なり。其主人人に其始終を語れり。かの家

はたけ

の者一同ある日畠に行きて夕方に歸らんとするに、女川の汀

ウツクマ

ヒル

に踞りてにこくと笑ひてあり。次の日は晝の休に亦此事あ

り。斯くすること日を重ねたりしに、次第に其女の所へ村の何

ダ

ヨルヨルカヨ

ウツサ

某と云ふ者夜々通ふと云ふ噂立ちたり。始には智が濱の方へ駄

チンツケ

ネ

ヨル

賃附に行きたる留守をのみ窺ひたりしが、後には智と寝たる夜

さへ來るやうになれり。河童なるべしと云ふ評判段々高くなり
たれば、一族の者集りて之を守れども何の甲斐も無く、賀の母
も行きて娘の側^{カタハラ}に寝たりしに、深夜にその娘の笑ふ聲を聞き
て、さては來てありと知りながら身動きもかなはず、人々如何
にともすべきやうなかりき。其産は極めて難産なりしが、或者
の言ふには、馬槽^{ウマフチ}に水をたゝへ其中にて産まば安く産まるべし
とのことにて、之を試みたれば果して其通りなりき。その子は手
に水搔^{ミズカキ}あり。此娘の母も亦曾て河童の子を産みしことありと云
ふ。二代や三代の因縁には非ずと言ふ者もあり。此家も如法の
豪家にて〇〇〇〇〇と云ふ士族なり。^{そんかいぎいん}村會議員をしたることも
あり。

五六 上郷村の何某の家にて河童らしき物の子を産みたる
ことあり。確なる證^{あかし}としては無けれど身内眞赤^{マツカ}にして口大きく、
まことにいやな子なりき。忌^{イマ}はしければ棄てんとて之を携へて
道ちがへに持ち行き、そこに置きて一間ばかりも離れたりしが、
ふと思ひ直し、惜しきものなり、賣りて見せ物にせば金になるべ
きにとて立歸りたるに、早取り隠されて見えざりきと云ふ。

五七 川の岸の砂^{スナ}の上には河童の足跡と云ふものを見ること
決して珍しからず。雨の日の翌日などは殊に此事あり。猿の足
と同じく親指は離れて人間の手の跡に似たり。長さは三寸に足
らず。指先のあとは人のゝやうに明かには見えずと云ふ。

五八 コガラセガハ ウバ コフチ ほとり シンヤ ウチ イヘ 小鳥瀬川の姥子淵の邊に新屋の家と云ふ家あり。ある

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

日淵へ馬を冷しに行き、馬曳の子は外へ遊びに行きし間に河童

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

出で、其馬を引込まんとつし、却りて馬に引きずられて厩の前

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

に來り、馬槽に覆はれてありき。家の者馬槽の伏せてあるを恠

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

しみて少しあけて見れば河童の手出でたり。村中の者集りて殺

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

さんか宥さんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯をせ

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

ぬと云ふ堅き約束をさせて之を放したり。其河童今は村を去

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

りて相澤の瀧の淵に住めりと云ふ。

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

五九 外の國にては河童の顔は青しと云ふやうなれど、遠野の

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

河童は面の色赭きなり。佐々木氏の曾祖母、穉かりし頃友だ

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

ちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃の木の間より、

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

眞赤なる顔したる男の子の顔見えたり。これは河童なりしとな

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

り。今もその胡桃大木にて在り。此家の屋敷のめぐりはすべて

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

胡桃の樹なり。

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

六〇 和野村の喜兵衛爺。雉子小屋に入りて雉子を待ちしに

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

狐屢出で、雉子を追ふ。あまり悪ければ之を撃たんと思ひ狙

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

ひたるに、狐は此方を向きて何とも無げなる顔してあり。さて

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

引金を引きたけれども火移らず。胸騒ぎして銃を検せしに、

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

筒口より手元の處までいつの間にか悉く土をつめてありたり。

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

六一 同じ人六角牛に入りて白き鹿に逢へり。白鹿は神なりと

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

云ふ言傳えあれば、若し傷けて殺すこと能はずば、必ず祟あ

フチ

ヒヤ

ウマヒキ

ホカ

るべしと思案せしが、名譽の獵人なれば世間の嘲りをいとひ、

シアン
メイヨ
カリウド
セケン
アザケ
テゴタ

思ひ切りて之を撃つに、手應へはあれども鹿少しも動かず此時

ムナサハ

ヘイゼイマヨ

キキウ

もいたく胸騒ぎして、平生魔除けとして危急の時の爲に用意し

ワウゴン

タマ

ヨモギ

たる黄金の丸を取出し、これに蓬を巻き附けて打ち放したれ

ど、鹿は猶動かず。あまり恠しければ近よりて見るに、よく鹿の

クラ

形に似たる白き石なりき。數十年の間山中に暮せる者が、石と

マシヤウ

シワザ

鹿とを見誤るべくも非ず、全く魔障の仕業なりけりと、此時ば

ヤ

かりは獵を止めばやと思ひたりきと云ふ。

ヨサンチウ

六二 又同じ人、ある夜山中にて小屋を作るいとま無くて、と

マヨ

ナハ

ある大木の下に寄り、魔除けのサンヅ繩をおのれと木とのめぐ

ミメクリ

タテ

カ、

りに三圍引きめぐらし、鐵砲を豎に抱へてまどろみたりしに、

ソウギヤウ

コロモ

ハネ

夜深く物音のするに心付けば、大なる僧形の者赤き衣を羽の

ハ

おお

やうに羽ばたきして、其木の梢に蔽ひかゝりたり。すはやと銃を

ナカゾラ

打ち放せばやがて又羽ばたきして中空を飛びかへりたり。此時

の恐ろしさも世の常ならず。前後三たびまでかゝる不思議に遭

タビゴト

ヤ

ウチガミ

グリーンガ

ひ、其度毎に鐵砲を止めんと心に誓ひ、氏神に願掛けなどすれ

カリウド

なりわい

ど、やがて再び思ひ返して、年取るまで獵人の業を棄つること

能はずとよく人に語りたり。

六三 小國の三浦某と云ふは無一の金持なり。今より二三代

ロドン

前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍なりき。この妻

カド マヘ

フキ ト

のある日門の前を流るゝ小さき川に沿ひて路を採りに入りしに、

よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立
派なる黒き門の家あり。訝しけれど門の中に入りて見るに、大
なる庭にて紅白の花一面に咲き雞ニハトリ多く遊べり。其庭を裏の方
へ廻れば、牛小屋ありて牛多く居り、馬舎ありて馬多く居れど
も、一向に人は居らず。終に玄關より上りたるに、その次の間に
は朱と黒との膳ゼンワン碗をあまた取出したり。奥の坐敷には火鉢あり
て鐵瓶テツビンの湯のたぎれるを見たり。されども終に人影は無ければ、
もしは山男の家では無いかと急に恐ろしくなり、駆け出して家
に歸りたり。此事を人に語れども實と思ふ者も無かりしが、又
或日家のカドに出で、物を洗ひてありしに、川上より赤き碗一
つ流れて來たり。あまり美しければ拾ひ上げたれど、之を食器
に用ゐたらば汚しと人に叱られんかと思ひ、ケセ子ケセ子ギツの中に
置きてケセ子を量る器ウツワと爲したり。然るに此器にて量り始めて
より、いつ迄タ經ちてもケセ子盡ツきず。家の者も之を恠しみて女に
問ひたるとき、始めて川より拾い上げし由よしをば語りぬ。此家は
これより幸運に向ひ、終に今の三浦家と成れり。遠野にては山
中の不思議なる家をマヨヒガと云ふ。マヨヒガに行き當りたる
者は、必ず其家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出で、來べ
きものなり。其人に授サツけんが爲にかゝる家をば見する也。女が
無慾にて何物をも盗み來ざりしが故に、この碗自ら流れて來た
りしなるべしと云ふ。

六四 金澤村は白望の麓、上閉伊郡の内にも殊に山奥にて、

カ子サハムラ シロミ フモト

人の往來する者少なし。六七年前此村より栃内村の山崎なる

ナニガシ

某かゝが家に娘の智を取りたり。此智實家に行かんとして山

むじ

じつか

路に迷ひ、又このマヨヒガに行き當りぬ。家の有様、牛馬鶏の多

あた

アリサマ

きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りな

げんかん

り。同じく玄關に入りしに、膳碗を取出したる室あり。座敷に

鐵瓶の湯たぎりて、今まさに茶を煮んとする所のやうに見え、

どこか便所などのあたりに人が立ちて在るやうにも思はれたり。

ぼうぜん

茫然として後には段々恐ろしくなり、引返して終に小國の村里

ヲグニ

に出でたり。小國にては此話を聞きて實とする者も無かりしが、

マコト

山崎の方にてはそはマヨヒガなるべし、行きて膳碗の類を持ち

來り長者にならんとて智殿を先に立てゝ人あまた之を求めに

山の奥に入り、こゝに門ありきと云ふ處に來たれども、眼にかゝ

ムナ

るものも無く空しく歸り來りぬ。その智も終に金持になりたり

と云ふことを聞かず。

六五 早地峯は御影石の山なり。此山の小國に向きたる側に

ハヤチネ ミカゲイシ

ム

ガハ

アベガジヤウ

ケハ

ガケ

阿部ヶ城と云ふ岩あり。嶮しき崖の中程にありて、人などはと

ても行き得べき處に非ず。こゝには今でも阿部貞任の母住めり

あべのさだとう

いいつた

アメ フ

イハヤ

トビラ

トザ

と言傳ふ。雨の降るべき夕方など、岩屋の扉を鎖す音聞ゆと云

ツクモウシ

ふ。小國、附馬牛の人々は、阿部ヶ城の錠の音がする、明日は雨
ならんなど云ふ。

六六 同じ山の附馬牛よりの登り口にも亦阿部屋敷と云ふ巖窟あり。兎に角早地峯は阿部貞任にゆかりある山なり。小國より登る山口にも八幡太郎の家來の討死したるを埋めたりと云ふ塚三つばかりあり。

六七 阿部貞任に關する傳説は此外にも多し。土淵村と昔は橋野と云ひし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登りたる山中に、廣く平なる原あり。其あたりの地名に貞任と云ふ所あり。沼ありて貞任が馬を冷せし所なりと云ふ。貞任が陣屋を構へし址とも言い傳ふ。景色よき所にて東海岸よく見ゆ。

六八 土淵村には阿部氏と云ふ家ありて貞任が末なりと云ふ。昔は榮えたる家なり。今も屋敷の周圍には堀ありて水を通ず。刀劍馬具あまたあり。當主は阿部奥右衛門、今も村にては二三等の物持にて、村會議員なり。阿部の子孫は此外にも多し。盛岡の阿部館の附近にもあり。厨川の柵に近き家なり。土淵村の阿部家の四五町北、小鳥瀬川の川隈に館の址あり。八幡澤の館と云ふ。八幡太郎が陣屋と云ふものは是なり。これより遠野の

町への路には又八幡山と云ふ山ありて、其山の八幡澤の館の方に向へる峯にも亦一つの館址あり。貞任が陣屋なりと云ふ。二つの館の間二十餘町を隔つ。矢戦をしたりと云ふ言傳へありて、矢の根を多く堀り出せしことあり。此間に似田貝と云ふ部落あり。戦の當時此あたりは蘆しげりて土固まらず、ユキくと動

揺せり。或時八幡太郎こゝを通りしに、敵味方何れの兵糧にや、
粥を多く置きてあるを見て、これは煮た粥かと云ひしより村の
名となる。似田貝の村の外を流るゝ小川を鳴川と云ふ。之を隔
てゝ足洗川村あり。鳴川にて義家が足を洗ひしより村の名とな
ると云ふ。

六九 今の土淵村には大同と云ふ家二軒あり。山口の大同は

オオホランノジャウ

當主を大洞萬之亟と云ふ。此人の養母名はおひで、八十を超え
て今も達者なり、佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じたり。ま
じなひにて蛇を殺し、木に止れる鳥を落としなどするを佐々木
君はよく見せてもらひたり。昨年きゆうれきの舊曆正月十五日に、此老

女の語りしには、昔ある處に貧しき百姓あり。妻は無くて美し
き娘あり。又一匹の馬を養ふ。娘此馬を愛して夜になれば厩舎

ヨル

に行きて寝ね、終に馬と夫婦に成れり。或夜父は此事を知りて、

イ

めおと

其次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げ

ツ

て殺したり。その夜娘は馬の居らぬより父に尋ねて此事を知り、

驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋りて泣き

すが

ゐたりしを、父は之を惡みて斧を以て後より馬の首を切り落

ニク

ウシロ

せしに、忽ち娘は其首に乗りたるまゝ天に昇り去れり。オシラ

たちま

サマと云ふは此時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の
枝にて其神の像を作る。其像三つありき。本にて作りしは山口

モト

の大同にあり。之を姉神とす。中にて作りしは山崎の在家ザイケゴン權十

朗と云ふ人の家に在り。佐々木氏の伯母が縁付きたる家なるが、今は家絶えて神の行方を知らず。末にて作りし妹神の像は今附馬牛村に在りと云へり。

七〇 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマの在る家には必ず伴ひて在す神なり。^{イマ}されどオシラサマはなくてオクナイサマのみ在る家もあり。又家によりて神の像も同じからず。山口の大同に在るオクナイサマは木像なり。山口の^{ハチイシ}辻石たにえと云ふ人の家なるは掛軸なり。^{カケヂク}田圃のうちにいませるは亦木像なり。^{イヒデ}飯豊の大同にもオシラサマは無けれどオクナイサマのみはいませりと云ふ。

七一 此話をしたる老女は熱心なる念佛者なれど、世の常の念佛者とは様かはり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に道を傳ふることはあれども、互に嚴重なる秘密を守り、其作法に就きては親にも子にも聊かたりとも知らしめず。又寺とも僧とも少しも関係はなくて、在家の者のみの集りなり。^{アツマ}其人の數も多からず。^{サイニチ}辻石たにえと云ふ婦人などは同じ仲間なり。阿彌陀仏の齋日には、夜中人の静まるを待ちて會合し、隠れたる室にて祈禱す。魔法まじなひを善くする故に、^{こうどう}郷黨に對して一種の^{けんい}權威あり。

七二 栃内村の字琴畑は深山の澤に在り。^{コトバタ みやま}